

「あきたこまち」の新米を載せたトラックを見送る関係者。14日午前、海津市海津町江東、JAにしみの海津集出荷センター



西美濃農業協同組合(JAにしみ)は14日、県産米のトップを切って2025年産の早場米「あきたこまち」の出荷を始めた。15日から管内七つのファーマーズマーケットでつきたての白米を5キロ4300円台で販売する。全国農業協同組合連合会(全農)本部(JA全農岐阜)の関係者は「去年に比べ、卸や家庭の在庫もあるため価格も落ち着くと考えていたが、新潟県などで水不足による不作との報道が巡回相場が上がっている」と現状を分析。

県産新米 出荷開始

総量平年並み、全国価格は再び上昇

他の品種の収穫が始まれば5キロ3千円台後半、4千円前後に落ち着くと予測しながらも、猛暑による高温障害などで不作となれば高騰の懸念もある。関係者は「先行きは見通せない状況」と気をもむ。

「ツヤがあり、うまみと甘みがあるコメが出荷できる。異常な暑さの中でも、生産者による適切な管理のおかげ。新米らしい香りを味わってほしい」。海津市海津町江東のJAにしみの海津集出荷センターで14日開かれた初出荷式で、玉井寛之代表理事組合長はあきたこまちの出来に太鼓判を押した。今年は梅雨が短く稲の熟期が長かったことから順調に生育。検査で品質良好の一等米と認められ、関係者約30人が新米を載せたトラックを見送った。

JAにしみの管内では、あきたこまちを約240袋に作付け。他の品種より1カ月早い4月上旬に田植えし、今月6日から収穫が始まった。出荷量は平年並みの約900トを見込むが、JAにしみのは集荷量を確保するため、農家に支払う概算金を引き上げる方針。25年産のあきたこまちは最低保証価格が60キロで2万8千円と、昨年度の概算金1万8千円から

猛暑影響で相場先行き不透明



一等米の認定印が押されるあきたこまちの新米。同

大幅に引き上げた。15日から管内のファーマーズマーケットで販売するが、玄米価格は1キロ780円と、昨年の24年産と比べると5割弱、値段が上がる。

全国的にもコメ価格は7月下旬から再び上昇に転じている。スーパーでの銘柄米の5キロ平均価格は4500円前後。政

府による備蓄米の放出から期間がたち値下げ効果が薄れているほか、他県でも25年産米が出回り始めたのが要因とされる。JA全農岐阜によると、あきたこまちなど早場米は価格にプレミアムが付くことから、県内で今月下旬から収穫が始まるコシヒカリや9月末から収穫されるハツシモは小売価格が5キロ3千円台後半、4千円前後で落ち着くと予測する。

ただ、あきたこまちは暑さのピーク前に収穫できたが、今後収穫する他の品種は酷暑による高温障害で品質や収量の低下が心配される。JA全農岐阜米穀販売課の担当者は「他産地で著しく不作となれば値上がりする可能性があり、値動きは予測しづらい。5キロ3千円台というのが、消費者が安心して買い求められる価格なのだが」と話した。

政府は昨年夏からのコメ不足や価格急騰が、需給バランスの崩れによるものとして増産にかじを切ることを公表したが、ロードマップは示されていない。JA全農岐阜の西村寿文本部長はこの日の初出荷式で「現状を見れば増産は必要だが、作っても『出口』がなければいけない。農家が再生産(持続的に生産)できるよう、例えば国が適正な価格で買い取り、時期を見ながら輸出に回すなど需給調整機能を持たせるよう要求していく必要がある」と語った。

(亀山大樹)